5 湖北小まつりで

千葉県我孫子市立湖北小学校

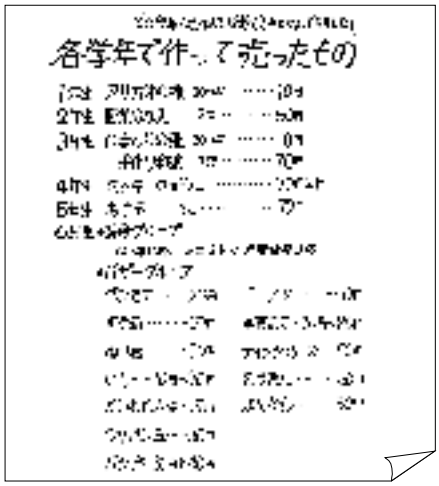
報告者　校長　小島一夫　　教頭　大久保俊輝

昨年度の湖北小まつりに児童会が初めて取り組んだユニセフ活動では、手作り雑きんや手作り石鹸を販売して集まった収益金を日本ユニセフ協会に届けました。

今年は、学年ごとのさまざまな取り組みが行われ、１年生は朝顔の種、２年生は野菜の苗、３年生はひまわりの種、４年生はミッキーの帽子、５年生はお手玉、そして６年生はバザーグループと募金グループに別れて活動しました。湖北駅頭で募金活動を児童と教員で５日間続け、39,103円の善意をいただきました。

湖北小まつり当日は、さまざまな取り組みで作り上げた品物を販売しました。全校をあげての取り組みが実って、今年の総額は165,896円となり昨年の４倍となりました。

それにもまして校長がかねがね申している「安易な募金意識であってはならない。何のためにするか、今自分たちに何ができるか、将来自分たちは何をするかなどの指標を持たせることが肝要である」ということが、子どもたちの日頃の行動に現れてきたことがうれしい。感想文を同封しますので、そこからお読み取りください。



協力ということ

５年　加藤桃子

５年生では、お手玉を売りました。私たちがユニセフ活動でお手玉を売ろうと考えたのは総合的な学習の時間にお年寄りにいろいろな遊び道具を教えてもらい、その中でお手玉を選びました。みんな気合を入れて作りました。できあがったお手玉を三つ一組にし、ふくろに入れ、きれいなリボンで結びました。

「いらっしゃいませ。いらっしゃいませ。かわいいお手玉どうですか。」買いに来たお客様がうれしそうにお手玉を手に取りました。１時間たたないうちにすべて売れました。私はなみだが出そうなくらいうれしくてたまりませんでした。こんなに売れたのも宣伝活動やほかにがんばってくれた人たちのおかげかな、作っているときのみんなの気持ちが買ってくれる人に強く伝わったからかなと思いました。

世界には小学生なのに水くみや工場で働いたりして学校にいけない子どもがたくさんいるそうです。そのような子どもたちが学校に行って勉強できるように、また、来年もがんばってユニセフ活動を続けていきたいです。

ユニセフ募金活動をして

６年　猿渡綾乃

私はユニセフ募金と決まったとき、とても気楽な気持ちでした。それは、たぶん世界の子どもたちのことを知らなかったからだと思います。でも、活動が進むにつれて、だんだん世界の子どもたちがどんなにつらい思いをしているかが分かってきました。私ががんばれば何百人もの子どもたちが救えるんだと思いました。

まず、人がいっぱい集まる駅とコンビニで一週間募金をすることにしました。コンビニには募金箱を置き、駅で私たちが活動します。駅で配るチラシ、新聞を係の人が作ります。

次に小学校に子どものいない人にも募金活動のことを知ってもらうために各地区の自治会長さんにたのんでチラシを回らん板で回してもらいました。ほかにも校内放送で呼びかけたり、近所のお祭りでも募金活動をしました。駅での活動当日、私は最初だから千円くらいだと思っていたけど２千円ぐらい集まりました。二日目は私の当番日で配ったチラシを捨てる人がいるんじゃないかと不安な気持ちでした。だけど、チラシを捨てる人は一人もいません。すごく急いでいる人も高校生も立ち止まって「がんばってね」と言って募金をしてくれます。そして一週間で集まった金額は６万円以上でした。自分たちの力でこんなに集まったなんて信じられませんでした。だけど、一番感謝したい人は募金をしてくれた人たちです。私が大きくなって駅などでユニセフ等の募金をしていたら、やはりこの募金に協力してくれた人たちのようにやさしい気持ちで協力したいと思います。

（朝日新聞 1999/11/11）